様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３９１０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３２３７

研究課題名（和文）大正自由教育における子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計

研究課題名（英文）A Study on Children's and Tearchers' Participation in Designing School Space of Taisyo New School

研究代表者
志村　廣明（SHIMURA, Hiroaki）

中部大学・全学共通教育部・教授

研究者番号：６０１４１４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）： 本研究は、大正自由教育をリードした学校において、子ども学校空間の設計において・教師の参画による学校空間の創造の試みがあったかを検討しようとするものである。
　筆者は、大正自由教育を担った学校の中から私立の自由学園、文化学院並びに成城学園に絞って、これら３校の学校所蔵資料の収集に努めた。収集した資料を基に、これらの学校の子ども・教師の参画による学校空間の創造の事例をできる限り具体的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The main porpuse of this study is to bring to light children's and tearchers' participation in designing school space of Taisyo new school. i try to research materials that jiyu Gakuen ,Bunka Gakuin and Seijyo Gakuen have been in charge. Children's and teachers' participation in designing school space of these schools are viewed attentively. I intend to give the actual pictures as concretely as possible.

研究分野： 教育学

キーワード： 大正自由教育　子ども・教師の参画　学校の教育空間

１．研究開始当初の背景

本研究課題の申請時には、平成 15 年に刊行した『大正自由教育における教室環境の実証的研究　平成 12 年度～平成 14 年度　科学研究補助金（基盤研究(C)(2) ）研究成果報告書』で発表した研究内容をさらに深め、発展させたいと考えていた。

そこで、「子ども・教師の参画」をキーワードとして、大正自由教育をリードした新学校における教育空間創造の試みを検討したいと思い、科研費を申請した。

平成 15 年に刊行した先の研究成果報告書においても自由学園の教育空間を取り上げたが、自由学園では、子ども・教師の参画による学校空間の創造が試みられていたので、その内容をさらに深く掘り下げたいと考えた。それに加え、自由学園以外の大正自由教育を担った学校にも、自由学園と同様の試みがあったかどうか検討することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、欧米における子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計の理論と実践を視野に入れつつ、日本の近代学校の歴史、とりわけ大正自由教育の歴史のなかで見落とされてきた子ども・教師の参画による学校の教育空間の歴史の具体像に光を当てようとするものである。本研究のテーマ設定は、1957 年の第 20 回国際公教育会議で採択された「学校建築の拡張に関する勧告」（永井健一監修『教育条約集』1987 年）とロジャー・ハート著、IPA 日本支部訳『子どもの参画』(2000 年）に触発されたものである。

報告者は、日本においてもフランク・ロイド・ライトとその高弟の遠藤新によって設計された自由学園の教育空間はまさに子ども・教師の参画によって生み出された貴重な具体例であり、自由学園に限らず大正自由教育をリードした私立学校の建築には、こうした視点が生かされていると考えた。このような問題意識に立脚して、大正自由教育の歴史のなかから、子ども・教師の参画による学校設計の具体例を掘り起こして、その全体像を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

大正自由教育をリードした学校のなかから、子ども・教師の参画による学校の教育空間の創造の試みがあったと考えられる自由学園、文化学院並びに成城学園に絞って、これらの学校に保管されている学校所蔵資料の調査・収集に力を入れた。

それに加え、大正自由教育をリードした学校あるいはその学校の教師等が記した著書・雑誌論文等についても徹底的に調査を行った。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

平成 27 年 3 月 31 日、本研究のまとめとして『大正自由教育における子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計　平成 24 年度～平成 26 年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究　研究成果報告書』（62 頁）を作成した。その目次を示すと、以下のとおりである。

はしがき

Ｉ、日本の学校建築・設備改善のための提言

一、子ども・教師の視点を重視した学校建築・設備改善論―棚橋源太郎『学校設備用品』（1915 年）の分析を通して―

二、教師の参画による学校空間の創造を目指して―山松鶴吉の学校建築・設備改善論―

II、子ども・教師の参画による学校空間の創造

一、 自由学園のばあい

二、 文化学院のばあい

三、 成城学園のばあい

Ｉの一は、本研究成果報告書の中心テーマの「子ども・教師の参画」による学校の教育空間創造の試みに繋がる学校建築・施設改善論について考察を加えたものである。これまで研究対象として注目されていなかった棚橋源太郎の『学校設備用品』（1915 年）に光を当てた。報告者は、欧米の学校建築・設備の最新情報を視野に入れつつ、日本の貧困な教育財政の下でも学校建築・設備の改善を図ることを訴えた棚橋の学校建築・改善論を明らかにした。それは、子ども・教師の視点を重視した学校建築・施設改善論として注目に値するものである。

Ｉの二も、本研究成果報告書の中心テーマの「子ども・教師の参画」による学校の教育空間創造の試みに繋がる学校建築・施設改善論を検討したものである。本研究成果報告書では、これまで殆ど考察の対象になっていなかった山松鶴吉の学校建築・施設改善論に光を当てた。明治以降の日本の学校建築において、子どもの教育に直接関係のない立派な門、玄関や応接室の設備のために多くのお金が使われ、机・腰掛け、窓掛けや黒板などには十分なお金が掛けられていないことを告発した。そして、子どもの教育に直接かかわる机・腰掛け、窓掛け並びに黒板等の改善を図

ることを訴えた。子どもにとって快適な教育空間を用意するためには、学校建築の設計に教師の参画が不可欠であると、山松は考えた。

Ⅱの一においては、平成 15 年刊行の報告書においても、自由学園の教育空間を論じたが、今回はとくに「子ども・教師の参画」による学校の教育空間の設計という視点に絞って、自由学園の教育空間づくりの試みをこれまで以上に深めることが出来たと考える。また、自由学園女学校の子どもたちと教師羽仁吉一による学校の教育空間創造への参画の試み並びに建築家遠藤新と子どもたち・羽仁吉一との強い絆を垣間見ることができた。

なお、学校の教育空間創造における生徒の参画の原動力になったのは、自由学園の自治活動を推進した「学生委員会」であったと考えられる。

Ⅱの二においては、1937（昭和 12）年に文化学院で建設された鉄筋コンクリート造りの校舎を研究の対象とした。この校舎については、これまで十分に検討されてこなかったが、本研究成果報告書では、この校舎の建築プラン、それに対する生徒の要望、さらには生徒の要望を受けて西村伊作を中心とする学校側がどのように対応したかを明らかにできた。それに加え、生徒が学校側に要望を出す上で、文化学院の「学友会」が、『文化学院新聞』を通して生徒の団結を促し、学校側と生徒たちを繋ぐ上で重要な役割を果たしていたことを確認できた。

Ⅲの三においては、これまでほとんど研究の対象にならなかった成城学園高等学校における生徒の参画による学校の教育空間創造の試みに光を当てた。このような生徒の参画を積極的に推進したのが、当時の高等学校の校長であった小原國芳である。小原は、校舎の改築や体育館の設計に生徒を参画させ、体育館の設計の具体案を提出させたりした。また、高等学校の教師が力を合わせ校舎の改築にあたって生徒の要望を調査し、生徒から出された課題を真摯に受け止めて、それを改築に生かす努力を行った。こうした学校側の姿勢は高く評価されねばならないと思う。

以上述べたことから明らかなように、本研究成果報告書において、大正自由教育をリードした日本の新学校において、学校の教育空間を創造するうえで子ども・教師がどのようにかかわっていたのか、とりわけ自由学園、文化学院並びに成城学園では、子ども・教師の参画による学校空間創造の試みがあったことを明らかにできた。

（２）、国内外における位置づけとインパクト

本研究成果報告書において論じたような「子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計」という視点に基づいた先行研究は多くはない。報告者が知る限り、拙論『大正自由教育における教室環境構成の実証的研究 平成 12 年度～平成 14 年度　科学研究補助金（基盤研究(C)(2) ）研究成果報告書』（2003 年 3 月）、渡邊隆信「ドイツ新教育における学校空間の創造――オーデンヴァルト校を事例として」（『兵庫教育大学研究紀要』第 39 巻 2011 年 9 月）並びに小林正泰『関東大震災と「復興小学校」学校建築にみる新教育思想』（勁草書房　2012 年 12 月）のみであると思う。

本研究成果報告書は、大正自由教育をリードした自由学園、文化学院並びに成城学園における子ども・教師の参画による学校の教育空間の創造について本格的に論じたものとして位置付けられることを願っている。

また、この研究成果報告書が読まれることを通して、子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計の必要性について多くの人が考えるきっかけとなればと願っている。

報告者は、今後日本においても子ども・教師の参画による学校空間の設計という視点が重視されるならば、今回研究成果報告書にまとめた「子ども・教師の参画による学校の教育空間の歴史」を検討することによって、日本の学校建築、とりわけ豊かな教育空間の在り方を検討するための基礎データを提供できると考える。

また、子どもの参画による学校の教育空間の創造を実現することが、ロジャー・ハートの言う「子どもの参画」の促進に繋がり、ひいては国際連合の子どもの権利条約の日本での実現を前進させるものであると確信している。

（３）、今後の展望

報告者は、2003 年に刊行した拙論『大正自由教育における教室環境構成の実証的研究 平成 12 年度～平成 14 年度　科学研究補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』と今回の『大正自由教育における子ども・教師の参画による学校の教育空間の設計　平成 24 年度～平成 26 年度　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究　研究成果報告書』の内容を合わせて精査して、出版したいと考えている。

子どもの自発性を重視する大正自由教育の教育実践にふさわしい教育空間の具体像を明らかにすると同時に、その教育空間をだれがつくるのか、その際子ども・教師の参画があったのかどうかという視点から本研究内容をさらに深めたいと思う。

現段階で分かっていることは、子ども・教師の参画による学校の教育空間の創造が実施された学校は、大正自由教育をリードした学校のなかでも多くはなかったということである。こうした学校の空間づくりが大きな広がりを見せなかったのはなぜか、教育財政の問題も含め問い続けたいと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　０件）

〔学会発表〕（計　　０件）

〔図書〕（計　　０件）

６．研究組織

(1) 研究代表者

志村廣明（SHIMURA ,Hiroaki　）

中部大学・全学共通教育部・教授

研究者番号：60141446